

02 中野区弥生町三丁目プロジェクト

Public Space Design Densely Inhabited District

空き地の新たな活用法の検討



■活動地域

東京都中野区弥生町三丁目周辺地区

■活動期間

2016年6月～継続中

■活動体制

工学院大学 野澤研究室
UR 都市機構

■活動キーワード

木造密集市街地／公共的空間活用／商店街活性化／
空き地活用／暫定利用

■2019年度活動メンバー

M1：浅川遥友 B4：岩澤瑠輝、影山秀治、河原天馬、
高草木響、高山壘、松村叡英
B3：奥津友里香、芹澤敬昭、畠山陸、藤井知香、柳澤加奈

対象地の概要

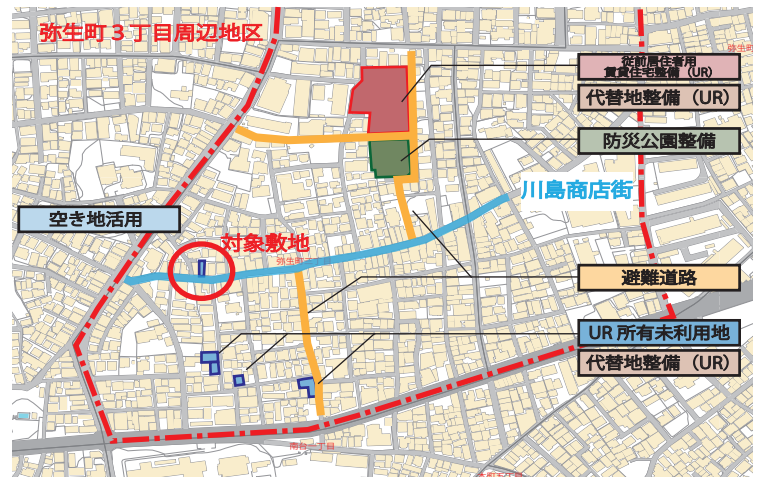
弥生町三丁目は周辺地区は、西新宿から約2km圏内に位置している。都心立地にもかかわらず閑静な住宅地であり、下町情緒に溢れ、ドラマや映画のロケ地としても多く利用される川島商店街がある。また、商店会を中心に地域のコミュニティ活動が盛んな地域でもある。

しかし、木造住宅の密集する市街地は狭あい道路や行き止まり道路等が多く、災害危険性が高い。また、商店街は高齢化によるシャッター店舗増加の傾向が見られる等の問題を抱えている。

活動経緯

本弥生町三丁目周辺の防災整備事業を行う際にUR都市機構が取得した従前居住者用の代替地（現在は不燃化促進用地として防災フェンスが設置されている）を対象に空間活用を行ってきた。

昨年度に安全上の理由で敷地内への立ち入りが難しくなった。そこでUR都市機構と敷地の前を利用した新たな活用案を検討し、「まちなか黒板」として自由な利用ができる黒板の設置へ向けて作業を進めている。



これまでの活動

空き地の空間活用に向けて、初年度は対象地の特性を把握するための現地調査や事例研究を行い、2017年より実践的に空き地の活用を始めている。

2016

対象地の特性を把握するための現地調査や、空き地の活用方法を学習するための事例研究などを行った。

2017

ハロウィンや東京行灯祭など商店街主催のイベントへの協力と、それに合わせた自主的な用地活用モデル企画を行った。

2018

6月にらくがきあそびを実施した。その後、安全上の理由で敷地内が使えなくなったため、UR都市機構と敷地の全面フェンス等を利用した活用案を検討した。

今年度の活動内容

【今年度の活動目的】

敷地内での活動が難しくなってしまったため、UR 都市機構や商店街の方々の意見も頂きながら敷地前面部分を利用した活用案を検討する。公共性の高い活用を目指し、市街地全体の価値を高めるような活用方法を提案する。

【現地調査】

黒板を設置することで見出される地域のさらなる可能性を発見するために12月に現地調査を行った。調査では防災整備事業により新しくできたまちや商店街の現況を把握した。

調査を踏まえて、今回活用する2号地の黒板を起点とし、周辺のまちや他の空き地も巻き込んだ活用を行なっていくことで、弥生町三丁目全体の価値・魅力向上に繋げていく活用の必要性を感じた。

【黒板活用方法の検討】

黒板の運用に向けて、使用ルールの整備、黒板の運用開始時や日常利用の内容について検討を行った。利用者が手を加えることで完成するアートや、日常からアンケートフォームによる意見の募集を行うことで、地域住民が愛着を持って育てていく黒板を目指す。

【黒板製作】

黒板とフェンスのデザインについてUR都市機構との打ち合わせを重ね、2月に敷地前面のウッドデッキやウッドフェンス、黒板の板面の設置が完了している。ここから、学生が主体となって黒板塗料の塗布や、周辺設備の作成などの作業を行い、来年度からの本格運用を目指して黒板を作成している。

【商店会との意見交換】

川島商店街振興組合の会合に出席し、黒板の活用に関する説明と意見交換を行った。活用の想定やイメージを共有することで、備品管理や緊急時対応の補助、各商店への広告の掲示など、商店街の方々から理解と協力を得ることができた。地域に根ざした黒板を作っていくため、今後も定期的に会合へ参加し、より堅固な連携体制を築いていくことを目指す。

【来年度の活動予定】

3月に黒板が完成するため、来年度は黒板の運用がメインとなる。まずは学生が主体となって、日常的な黒板の利用を促していく。いずれは地元の方々が自立して黒板の運用をしていけるような環境づくりを行っていく。

